

JSHCT Letter No.11

The Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation

日本造血細胞移植学会

September 2002

発刊発行：日本造血細胞移植学会 〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町65番地 名古屋大学医学部第一内科内 TEL (052) 744-2146 FAX (052) 744-2161
発行者：河 敬世 編集責任：日本造血細胞移植学会編集委員会 印刷：株式会社セントラルコンベンションサービス 年4回発行：2002年9月

第25回日本造血細胞移植学会総会に向けて 経過報告

(大阪府立母子保健総合医療センター、小児内科)
会長 河 敬世

今年の10月24日、25日の2日間、大阪国際会議場で開催されます第25回日本造血細胞移植学会総会の準備状況についてご報告させていただきます。

一般演題は410題の応募がございました。今回はすべてインターネットでの申し込みとさせていただきます。会員の皆様への文書でのご案内が遅くなり、大変ご迷惑をおかけしましたことをまずお詫びいたします。今回の応募数は昨年の北海道札幌での学会と比べましても約10%の演題数の増加でありまして、過去最高と思われまます。ご応募いただきました皆様方に厚く御礼申し上げます。プログラム委員の先生方にお願ひしまして、この中から3題がシンポジウムに、また80題がワークショップに選ばれました。残りの327題は、24日、25日の2日間、ポスター展示をしていただきます。全体の展示は10Fですが、看護関係は12Fに集めさせていただきます。また24日の15時から16時30分の間は、ポスター前での発表/討論時間ですので、発表者はポスター前で待機し司会者の指示に従ってください。

今回の第25回総会のテーマは「バリアーを超えて」といたしました。前回もふれましたが、HLAのバリアーや年齢のバリアー、人種や国境のバリアーを克服し、病苦と対峙しているすべての患者さんに最良の移植医療を提供することが、本学会の使命でありますし我々の努めでもあります。このテーマにふさわしい盛りだくさんの内容のプログラムができつつありまして、特別講演(12)や招待講演(12)、シンポジウム(1~4)、特別セミナー(1~4)、ランチセミナー(1~8)、ワークショップ(1~10)が計画されています。新しい企画の特別セミナーとして1)HSC Tとウイルス感染、2)免疫抑制剤の適正な使用法、3)血縁者間ミスマッチ移植、4)HSC Tとスキンケア、がありますが、これはセミナーの前にそれぞれの分野の第一人者からのプレセミナー(教育講演的ミニレビュー)を聞いていただいてからセミナーをはじめていただくようになっております。また、三重大小児科の東先生が中心となられ、移植患者の麻疹についての緊急アンケート調査が行われましたので、成人の麻疹問題と同様に、緊急課題としてワークショップで議論していただくことにしました。

本学会の特徴のひとつは、看護師をはじめとしたコメディカルの方々の参加が多いに

とです。子育て中の方々にもご参加いただけますように、会場内に無料託児所を設置いたします。対象は6ヶ月から6歳のお子さんで、24日と25日の8:30～18:00の間ですが、事前登録していただくことになっておりますので学会ホームページ (<http://www2.convention.jp/jshct25/>) をご利用ください。

学会の抄録集は、10月はじめには皆様方のお手許にお届けすべく準備を進めております。ところで今年の春先にはとても想像できませんでした。阪神タイガースは首位からBクラスへと転落しすでに秋風が吹いておりますし、23日の懇親会場のUSJ(申し込みはすでに締め切らせていただきました)も次から次へと物議をかもししております。この様子ですと、当初の活気のある大阪を見ていただけないかも知れませんが、その分、本来の学術面で大いに盛り上げ、ご来阪される皆様方にご満足いただける学会にすべく関係者一同鋭意努力中でございます。全国から多くの会員の皆様にご来阪、ご参加いただきますようお願い申し上げますとともに、皆様方とお会いできる日を楽しみにしております。

「第25回総会事務局からのお知らせ」

託児所

このたび第25回日本造血細胞移植学会総会では、育児中の皆様にも安心して学会に参加していただけるよう無料託児所を設けます。

(開設時間:平成14年10月24日(木)～25日(金)8:30～18:00)

ご利用は申込制となっておりますので、総会ホームページから託児カルテ・申込書をダウンロードのうえ、10月15日(火)までにFAXにてお申し込みください。

スペースの関係上、お預かりできるお子さまの人数には限りがございますのでなるべく早めにお申し込みいただきますようお願いいたします。

禁煙

第25回日本造血細胞移植学会総会は全会場禁煙とさせていただきます。

喫煙は5Fキューブサンク(カフェテリア)の喫煙スペース等をご利用ください。

『私的さい帯血バンクに関する声明文』

平成14年8月19日
日本造血細胞移植学会
会長 河 敬世

白血病などの難治性血液疾患に対する根治的治療法である造血幹細胞移植は、骨髄移植や末梢血幹細胞移植、さい帯血移植と多様化し、それぞれに適した移植実施例数が大幅に増加しつつある。増加移植例のほとんどは、血縁者間に移植ドナーが見出せない患者の方々に、公的機関である日本骨髄バンクや日本さい帯血バンクネットワークを介して提供された非血縁ドナーからの移植片により行われている。移植を希望するすべての患者の方々に、公平にかつ適正に移植医療を提供するためには、社会が相互に助け合うという理念に基づいて設立された骨髄バンクドナー登録数ならびにさい帯血備蓄数増加が強く望まれる。

最近、自分自身の将来の病気の可能性に備えて出生後のさい帯血を保存することを目的とする私的会社が営業を開始している。しかし、現在営業を行っている会社のさい帯血の採取や保存方法に関しては技術的な問題点が指摘されており、また実際に移植に必要な量のさい帯血が保存されていないこともあり、その安全性と有用性に関しては疑問をもたざるを得ない。さらに、私的使用を目的として営業を行っているいくつかの会社は、白血病などの難治性疾患に対する社会の不安を背景とし、一方でまだ確立していないさい帯血幹細胞の体外増幅技術や再生医療への応用を謳うなど誇大宣伝も行っている。

このような状況に対し、日本造血細胞移植学会はさい帯血の至適利用に関して以下のような声明を発表する。

- 1 さい帯血の保存事業は、安全性が確保され、実効性がありかつ適正に運用されなくてはならない。しかし昨今の私的目的のために営業活動を行っている事業体に関しては、技術の適格性に疑問があり、なおかつ実効性が未確定の用途を含んだ誇大宣伝を行っていることに日本造血細胞移植学会は強い懸念を表明する。
- 2 移植を目的としたさい帯血の保存事業は、すでに家族内に血液難病の患者が存在する場合などを除き、私的なさい帯血の保存は実効性が極めて乏しく、国が推進するさい帯血バンクネットワークをさらに拡充することが国民的重要課題であることを再確認する。
- 3 私的なさい帯血の保存事業に関しては、しかるべき技術指針や安全性確保のための遵守事項などの規制が必要であり、厚生労働省は速やかに事実関係を調査し、国民の健康を守るためにしかるべき対応をとるべきものと考えます。

留学教室紹介

Fred Hutchinson Cancer Research Center (フレッド・ハッチンソン癌研究所)

名古屋大学大学院医学研究科 病態内科学講座分子細胞内科学
村田 誠

フレッド・ハッチンソン癌研究所は、ここ米国西海岸ワシントン州シアトル市にあります。シアトルは、入り組んだ湾と美しい湖、それを取り巻く山々に囲まれた自然豊かな街で、しかも一年中比較的安定した温暖な気候に恵まれていることから、アメリカの中でも暮らしてみたい憧れの都市として毎年上位にランクされる街です。加えて全米大都市の中では比較的犯罪発生率が低く、また米国本土では日本から最も近い都市であることから日本人移住者が多く、まるで住み慣れた街のように大変居心地のよいところです。

研究所の歴史は今から半世紀近く前の1956年、外科医のウィリアム・ハッチンソン博士が政府の援助を受けて医学研究財団を設立するところから始まります。当初、医学全般を助成対象としていましたが、彼の弟でメジャーリーグ・ベースボールプレイヤーだったフレッド・ハッチンソン選手が1964年に肺癌(享年45歳)で亡くなったことを契機に癌領域の研究助成に重点を置くようになり、財団の一部門として「癌センター」を開設しました。一方、1957年に世界で初めてヒトに対する骨髄移植を報告したかのE. Donnall Thomas博士は、同じ頃(1963年)ワシントン大学医学部腫瘍学講座の初代教授としてシアトルに迎えられ、同時に財団の癌センターにおいても研究を開始します。Thomas博士は当時まだ実験的だった骨髄移植をヒトに対する治療法として確立すべく、さまざまな改良を加えていきました。この勢いに乗り遅れまいと1975年、癌センターは「フレッド・ハッチンソン癌研究所」として財団から独立します。その後今日までに当研究所で行われた造血幹細胞移植は8,000例を超えており、近年では年間およそ500例の移植を行っています。日本全国で過去実施された総移植数がおよそ18,000例(本学会平成13年度全国調査資料)であることと比較すれば、改めて単一施設としてのこの移植数には驚かされます。そしてThomas博士が骨髄移植法の確立に深く寄与したことを讃えられノーベル医学生理学賞(1990年)を受賞したことは、本学会会員の皆様はよくご存じのことと思います。

現在この研究所には2,300名以上の研究者およびそれを支えるスタッフが働いています。診療部門と研究部門に大きく分かれますが、前者に属する外来について最近大きな変革がありました。それまでフレッド・ハッチンソン癌研究所単独で行っていたものを、2000年からはワシントン大学医学部腫瘍科とChildren's Hospital and Regional Medical Centerと共同でSeattle Cancer Care Alliance(SCCA:allianceは「同盟」の意)を設立し、三者共同で外来診療に当たることになりました。癌を疑われた患者さんはどの施設を受診するか迷うことなく、SCCAを受診することでそれぞれの癌のエキスパートに出会える、というのが謳い文句ですが、これはSwedish HospitalやVirginia Mason Hospitalといった高い評価を得ている病院がシアトル市内にはいくつもあるということが同盟設立の背景にあります。一日の外来受診患者数は30名程度ですが、アメリカでは1人の外来患

者の診察に20～30分はかけるのが一般的ですし、日本ならば入院して行うような処置や治療も可能な限り外来で行いますので予約は常に満杯の状態です。入院施設は、SCCA(外来)からシャトルバスで10分程のところにあるワシントン大学医学部付属病院病棟の特定の階をフレッド・ハッチンソン専用フロアとして使っています。そこには常時40～50名の入院患者を抱え、そのほとんどは全米各地とくに海外から紹介されてきた造血幹細胞移植患者が占めます。

研究部門は基礎研究部門と臨床研究部門とに別れ、それぞれLee Hartwell博士とFrederick R. Appelbaum博士が代表を務めています。研究対象は造血幹細胞移植関連はもちろん、移植適応以外の癌も含め幅広く癌一般を対象としており、事実、基礎研究部門のHartwell博士は移植関連ではなく細胞周期の制御機構に関する研究をテーマとして、昨年のノーベル医学生理学賞を受賞しています。研究部門も、診療部門同様ワシントン大学医学部とは密接な関係にあり、当研究所の研究指導者のほとんどは同時に大学教官でもあります。

私の所属するProgram in Immunology(免疫科)は臨床研究部門に属します。ここはPhilip Greenberg博士とStanley R. Riddell博士の二人の指導者に、研究者、実験助手、臨床研究コーディネーター・ナースなどを加えた総勢30数名からなる比較的大きなラボです。主な研究テーマはサイトメガロウイルス感染症やメラノーマ(皮膚癌)に対する細胞療法、同種造血幹細胞移植後の白血病再発患者に対するマイナー抗原特異的Tリンパ球を用いた細胞療法などで、いずれも現在臨床スタディが進行しています。私は名古屋第一赤十字病院で小寺良尚・骨髄移植センター長の指導のもと造血幹細胞移植の臨床研修を受け、名古屋大学医学部で齋藤英彦・第一内科教授(現:国立名古屋病院長)の指導のもと基礎研究トレーニングを受けたのち、2000年3月よりRiddell博士の指導のもとマイナー抗原に関するプロジェクトに従事しております。

最後になりましたが、日本で本学会を通じて造血幹細胞移植分野における最新知識を数多く吸収することが出来たことに感謝申し上げるとともに、本学会および会員の皆様方の益々の御発展をお祈り申し上げます。

初秋のシアトルより



ラボのメンバーと近くのカフェにて。前列向かって左より
3人目がStanley R. Riddell博士、同4人目がPhilip Greenberg博士、同左端が筆者。